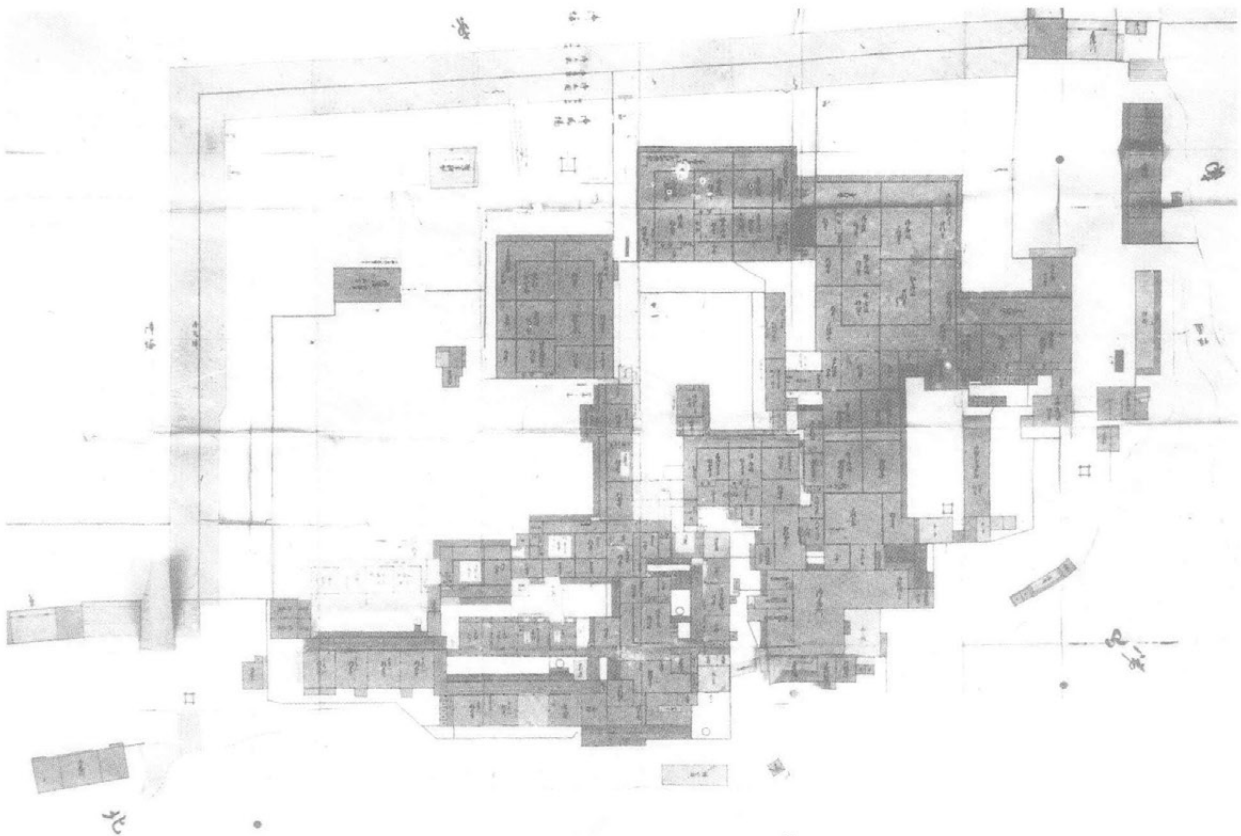






写12 旧表御殿絵図

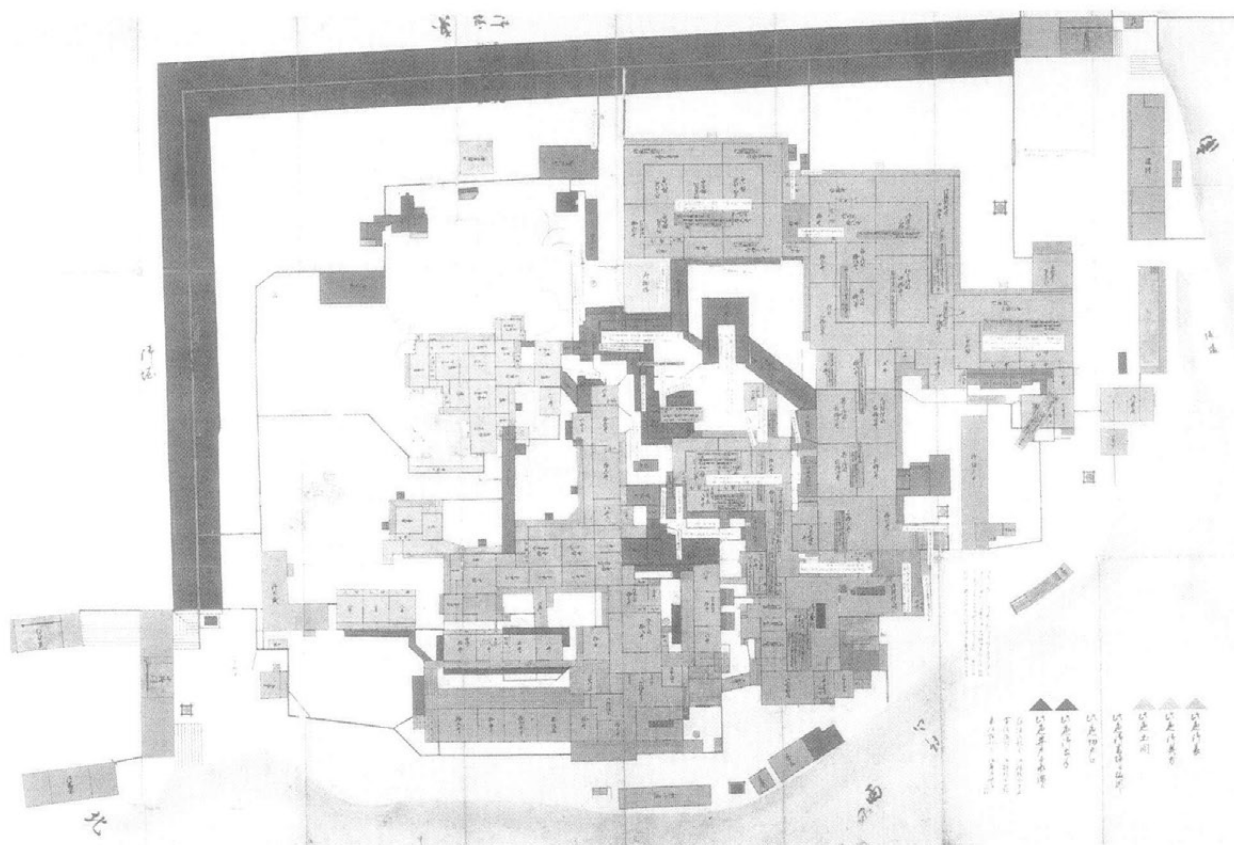
御殿の北半部には、表御座間の北西端の御鎖口を経て奥座敷である御客座敷・御座間に至り、その西方から北方にかけて長局が建ち並び奥向御殿を構成していた。

彦根城全体の配置図は、本丸・西ノ丸・鐘ノ丸・表御殿などの殿舎配置を示した御城内御絵図(写真11)がある。表御殿絵図では最も古く、創建当初に近い配置形式を示すものと思われる。すなわち、表向御殿は遠侍・寄附・広間・書院・守殿・御風呂屋・料理之間・台所・表座敷の殿舎構成をもつ。これより新しい初期の表御殿絵図(写真12)では料理之間の南に御納戸方御土蔵を、台所の西面と南面に御肴部屋・御膳部屋などの小部屋を、表座敷の東面北寄りに御小姓詰所と同東面南寄りに御鎖口・仕切御建物を増築している。写真11の奥向御殿は、御客座敷を奥座敷、御座間を新座敷と称し、山寄りの南北二棟の長局と、北長局の北東隅に御湯屋がある。写真12では長局と奥御殿の中間と奥御殿の北方に二棟の長局を増築し、表向と奥向の接点である鎖之口を拡張するなどの変化が認められる。

この創建当初に近い彦根城図の新座敷は、その名称から増築されたものと推定されるから、これら二枚の絵図を比較しても、表御殿は創建当初から次々と増築を重ねている状況を窺うことができる。

時期が下る文化年間までに描かれた絵図(写真13)によると、守殿と当初の長局のうち北の一棟がなくなり、奥向の御座間を同位置でやや桁行を狭めて改築し、その東北隅に連ねて御亭を、また、旧守殿の西に一部重複して御座之御間を増築して、新旧の奥座敷を高廊下で結ぶ。この新御殿の東面には御茶所を設け、新たに園池を穿つなど、奥向御殿を中心とした大造営が行われている。

その後の造営は表向御殿に移り、表御座間の御小姓詰所を改築して御張出御間とし、その東北方の新奥座敷との間に御休所を御書院西面の御湯殿に連ねて増築し、御書院・表御座之間の中庭の中央に能舞台を増築して笹



写13 新表御殿絵図

之御間との間に橋掛りを渡すなどの工事を行っている。

このように新しい時期の造営は、初期造営の建物の殆どを残して、その一部を廃し、あるいは改築するにとどめて、新たに園池を中心にした数寄屋風の小規模建築の増築が主となっている。

絵図による増改築の変遷の主なものは以上の通りであり発掘調査結果とも良く符号する。但し、発掘区の北端部では絵図にない建物礎石が発見され、時期的には最も新しいと思われるものが、奥向の御座之間と御亭に重複し、御座之間の北に連続して北方の未発掘区にのびるかなり大規模な殿舎の増築があり、これを終末期として表御殿の造営を終えたようである。

このようにして、表御殿の終末期の殿舎構成は、土居で囲われた北東隅の空地と園池を除くと空地の少ないこれ以上の増築の余地のない程に建蔽率の極めて高い構成となっている。

次に殿舎配置の特徴と各殿舎の機能について若干の考察を加えてみよう。

江戸幕府大棟梁平内家の秘伝書「匠明」（慶長13年・1608）殿屋集には武家屋敷の配置図を示した屋敷図と、その建物群のうちもっとも主要な建物である広間の平面図「昔主殿の図」「当代広間の図」が示されている。

屋敷図の敷地は方1町の広さの正方形で、東を正面とし東半部を表向御殿として、広間とその奥の御成御殿を中心にして、能舞台・書院・数寄屋などが附属する。また広間の北方には色代・遠侍のほか大台所・料理間などの家事作業を中心とした建物が占める。

敷地の西半分は奥向御殿で、対面所・書院・御寝間の各殿舎は広間から西北方に雁行して連なる主人の私生活用建物で、西北方に夫人のための御上方と女官の住む局を配置している。

彦根城表御殿と屋敷図を比較すると、屋敷図の広間には色代と遠侍が鍵型に取付き、表御殿では家臣詰所であ

る遠侍を別棟にして色代を寄附に、遠侍を色代に名称を変えているが、遠侍を分離した以外に平面形式や機能に大きな変化はないと思われる。

広間は公式の対面所である。屋敷図の対面所は私的なうちわの対面所であり、彦根城表御殿の御書院、二条城の黒書院に相当する。屋敷図の御成御殿は彦根城表御殿の表御座之間、二条城の白書院にあたる主人の日常の居間である。屋敷図の御寝間は主人の寝所であり、御上方の近くに設けている。彦根城表御殿には新しい奥座敷である御座之御間に御寝之間を設けている。屋敷図の御上方に相当する表御殿の殿舎は局との位置関係から御座之間であると思われるが、これに連なる御客座敷が初期には奥座敷として寝所にあてられていた可能性がある。

匠明屋敷図にあって彦根城の初期表御殿に欠けるのは能舞台と数寄屋であるが、これらの建物は上記のようにのちに増築され、匠明屋敷図に示された殿舎は全て揃う。それらの殿舎群の配置構成は基本的には匠明屋敷図と変わらないものと云えよう。

但し、彦根城表御殿で唯一つ、匠明屋敷図にはない主要殿舎は守殿である。この守殿は文字通りの性格の殿舎であるならば、奥向にあるはずであるが、建物規模が大きく、広間・書院とともに表向殿舎の中心をなしていることから、守殿は主殿の意で用いられたものと考えられる。匠明の昔主殿の図と当代広間の図を用いて当時の武家屋敷の主屋の新旧平面図を比較しているように、慶長年間以後は主殿に代って広間が広く用いられていることは諸大名屋敷の絵図等の史料からも窺える。

彦根城表御殿の守殿の機能的な性格について「彦根市史」では、寛永十一年七月に將軍上洛のための宿泊施設として臨時に造営されたものとしている。広間や書院に劣らない格式を備えた守殿が臨時の施設とは思えず、寛永年間に建設ののちは名古屋城御殿の上洛殿のような常設の殿舎のつもりであったに違いないが、のちになって新奥座敷と園池の新設のために廃されたのであろう。

いずれにしても、広間以外に守殿＝主殿と云う呼称の殿舎をもち、匠明屋敷図に良く似た近世当初の殿舎配置が明らかになり、その配置形式もまた中世以来の伝統を伝えている可能性が高いわけで、住居建築史上の資料的価値は極めて高い。

表御殿内の上水は、井戸と水道を用いている。飲料水や炊事用水は井戸で、池水・洗濯・風呂などは水道水によって賄ったのであろう。井戸は初期のもの七基のうち発掘調査で確認された台所や奥向殿舎にともなう四基は、いずれも凝灰岩を円筒型に削りぬいて積み重ねた丁寧なもので、やや遅れて掘られた広間脇のものは平面円型の石積井戸である。

上水道は文化元年の御樋筋絵図によると、南方の外濠湧水地に元枿を設け表御殿まで水を導いている。樋筋は三色に色別けされ、石御樋筋、竹御樋筋、新御樋筋がある。この書付からみて前二例は文化元年以前に敷設されたもので、新御樋筋は文化元年に新たにつけ替えられた水道と思われる。表御殿内には竹御樋筋が門櫓内まで引かれ、その先は分からないが、新御樋筋は土居の内側に沿って広間東側の石組の大型長方形溜樋まで導かれている。途中で池にも枝管を出して給水を行っていることから、この新御樋筋の敷設は大型溜樋や園池の造営工事にともなうものと考えられ、したがって、守殿を廃して、新奥座敷と園池および御亭の増築工事を行った時期は享和から文化初年にかけての頃に推定できるであろう。

長局の西に沿って石組溝が北から南に水を流しているが、この水路の途中に東に分枝した石組開渠・暗渠が六・七本検出されている。これらの溝は同時期ではないが、坪庭内の水溜や池への給水と敷地内の雨水の排水を兼ねたものであり、その給水源として、門櫓内まで導かれた御樋筋を利用したものと思われる。

表御殿内では石組暗渠が多く発見されており、木樋暗渠は一部、竹樋は確認されていないが、石組暗渠と木樋

・竹樋を併用する箇所も多かったと思われる。松本城二之丸御殿では竹樋を多く使い、赤穂城本丸御殿では土管を使用するなど、樋の種類に違いはあるが、水道を御殿内に導き、これらの樋を縦横にめぐらせて要所に溜枔を設け、雑用水として利用する方法は共通である。

以上は、彦根城表御殿の殿舎造営の経過と殿舎配置の特徴、および給水施設についての若干の考察を試みた。発掘調査ではとくに遺構の重複する北東部では苑路などの下層遺構の存在も一部で検出され、敷地の縁辺部分は未発掘であるなど、将来の調査に待つ部分を残したが、ほぼその全容を明らかにすることが出来、近世大名屋敷についての関連諸学の研究の上で貴重な資料を提供するものと確信する。